

序

東京大学文学部考古学研究室研究紀要も、1982年創刊以来、号を重ねて第9号を刊行する運びとなった。

この間、毎年絶えることなく刊行できたのも、研究室諸氏の努力と協力によるものと心から感謝したい。今年も研究室の日頃の研鑽の成果をここに収めることができた。

日本の考古学は、毎年各地で遺跡・遺物の新しい発掘報告が相次ぎ、一人の研究者がその情報のすべてを把握することはきわめて困難となっている。これが今日の考古学研究者共通の悩みであることはいうまでもない。しかし考古学はあくまでも、遺跡・遺物に基づく歴史学である。自己の参加する調査のほか、広く自らの足で歩き回って、できるだけ多く、自分の目で遺跡・遺物を実際に見なければ、考古学を論じることはできない。最近の報告書は記述、写真、実測図において、学術的に優れたものが多いが、それでもやはり現地に足を運び、実際の遺跡・遺物を見なければ独自の論を立てることはできない。遺跡の見学には、発掘中の竪穴住居とか土坑などの遺構の詳細な観察のほか、その遺跡の立地する地形条件などを把握することがきわめて重要である。その一方、出土遺物の細かい観察も行なわねばならない。つまり微視的にかつ巨視的に観察を行なうことである。そのような行動の積み重ねの後、自らの考えで論をまとめてもらいたい。このようなことはいまさら言われるまでもないと思うかも知れないが、本年度をもって本学を去るに当たり、ことに若い学生諸君への言葉としたい。

本紀要の将来は、研究室構成員すべての今後の努力にかかっている。考古学研究室及びこの紀要の一層の発展と、繁栄を心から願うものである。

なお最後になったが、本紀要の英文要約の校訂に当たって、本研究室大学院外国人研究生マーク・ハドソン氏のお世話になったことを記して感謝の意を表したい。また編集に当たった大塚達朗助手の労を多としたい。

東京大学文学部考古学研究室

上野佳也